

文化功労者に選出されて

第 6 期(1958 年卒業) 川崎信定

教養学科アメリカ分科第 6 期生の川崎は、平成 26 年 11 月 3 日付で国の文化功労者の一人として選出されて国から顕彰を受けました。「膨大な文献資料を検証し、緻密な分析によって、わが国のインド・チベット仏教思想に関する研究に新しい視点をもたらし、斯学の発展に多大の貢献をした」と評価されたのです。

「何故？ アメリカ科の出身者がインド・チベット仏教研究を？」 それでは、お話し申し上げます。

今から 60 年前の昭和 30 年の夏休み前に、私・川崎は本郷の東大文学部印度哲学科の著名な中村元教授の研究室ドアをノックしていました。後期の専門課程を未だ決めかねて迷っていたのです。突然の訪問にも招き入れてくださった中村先生。「寺の息子で、仏教を勉強したいが、印哲とか仏教といった、狭い学問にいきなり入るのが不安!」と、迷いを訴えた私に、中村先生は「かならず後には仏教に入るようになるから、心配しないでよい」と断言され、当時、駒場に開設されてまだ 5 年目の教養学科の中屋健次先生のアメリカ分科に進学して「なんでも良いから、思想を扱ってみること。仏教研究はそれからでよろしい」と薦められました。と同時に「英・独・仏のうちの一つの言語を使って考えることができるようにまでマスターすることが、これからは必要になります」と付け加えられました。

この中村先生の御指導に従って、アメリカ科に進学いたしました。・・・が、駒場の教養学科の教室で周りを見回すと、将来は外交官や一流商社・大企業就職を志す、胸を大きく張った仲間ばかりです。その中で一人だけ、風変わりな私の指導には、これまで同盟通信社・共同通信記者として情報社会の第一線で活躍されてきた中屋先生でも、さぞかし難儀をなされたことと思います。インディアナ大学のフォークロア(民話学)専門の Richard Dorson 先生、続いて N.Y.州立大学で哲学思想研究の Dale M. Riepe 先生を指導に付けてくださいました。卒論は「アイルランドからの移民カソリック労働者のアメリカ社会への適応・同化の研究」を、英文で何とか書き上げました。この後で、本郷の大学院人文科学研究科で印度哲学・仏教学研究を、まず専門語学の古典サンスクリット(梵語)の学習からスタートしたのです。この頃ちょうど、印度哲学科中村元教授の著書：『東洋人の思惟方法』2 巻が文部省の翻訳企画に入って話題になっておりました。当時、本郷には仏教研究を目的として多くのアメリカ人二世の学生がアメリカ西部やハワイから留学してきていました。彼らとの共同作業で、私もこの中村本の「インド人の思惟方法」部の 3 章の英訳を担当した時には、アメリカ科での修行が役に立ちました。

1959年にチベットのダライラマ法王のインドへの亡命がありました。「このままではチベットの伝統文化が喪失してしまう」との危惧の許に、ロックフェラー財団が世界8か国にチベット人の派遣を企画します。日本には、当時は国会図書館駒込分室とされていた東洋文庫にチベット・インフォーマント3名が到着しました。中村先生の御指示で、来日したばかりのサキャ派ゴル寺活仏ソナム師とニムマ派修験僧ケツン師の身の回りのお世話を始めたのが、私の博士課程1年目でした。はじめて耳にするチベット語の響きや、彼らの筆さばき、なにもかも初体験ばかりでした。こうした異邦人との交際をなんとかお勤めできたのは、駒場でかつてドールソン先生のフォークロア授業で鍛えられたことが無駄になってはいません。この日本に居ながらにしてのチベット体験は2年間継続しました。

その後、印度哲学科で私は研究助手を勤めましたが、1966-69年になると、これまた駒場の教養学科で10年前に私の卒論指導をなさったリーピー教授が、ニューヨーク州立大学バッファロー校での「東洋思想・仏教学」担当者としてのフルブライト派遣講師職務を、私に振り向けてくださったのです。若い髪の毛も抜け落ちてしまうような厳しい初体験でしたが、ヴェトナムからの帰還兵や、当時流行のヒッピーかぶれの若者に囲まれて、互いに生き生きと、率直に思うところを語り合う、楽しい日々を過ごしました。小訳書：『チベットの死者の書』（筑摩書房1989）も、このニューヨーク体験を経なかったならば、恐らく着手することはなかったでしょう。アメリカからの帰途、8ヶ月余りを過ごした西インド・プーナのバンダルカル研究所での古い仏典写本の研究体験も、今となっては貴重です。海外でお会いして、お世話いただいた教養学科先輩・同僚も多くありました。

80歳を間近にして、今、自らの研究人生を振り返る時、若き日のアメリカ科2年間は、その後の生き方に如何に大きく広がりを与えてくれたか、そして如何にすべてが貴重な縁となり、次へのスタートの確かな基盤であったかと、不思議に思えてなりません。

今の時代にあつてなお、地球規模の荒廃・飢餓・貧困・殺戮・戦争はとどまりません。人々の心には、言い知れぬ逼迫感・危機感が、むしろ増幅されています。でも、こんな時代だからこそ、何に頼り、何を次の世代に伝えるのか、一人ひとりが今こそ真剣に知恵の在り方・出し方を考える必要があります。

ブッダが持つ、人々を救う「一切智」の知恵の在り方・出し方を、写本研究を通じて永らく辿ってきた私・川崎でした。教養学科アメリカ科の中屋健弉先生の、あの視線の早さと広がりとを懐かしく思い起こしながら、これからの自らの姿勢を見つめております。